

ツルは1ヶ卵を生むと2日おいて又1ヶ産みます。そして2ヶ、3ヶの卵を産むと、おす、めす交代で卵をあたためて雛をかえします。めすが卵を産んでいる時、卵をあたためている時必ずおすは近くにいてばんをしています。飼育の係の人もこの時は要心して入ります。油断をしているとおすがかかつて来ます。くちばしでつゝかれたり羽でたたかれたりします。ツルは卵をだいてから3日目で雛にかえります。生れだちは茶色でピヨピーヨとなく、えさは、どじょう、小魚ですが、親がくわえて、雛の口先へもつていつてやらぬと食べない。下においていたのでは決して食べない。さぎ、ペリカンなどは親が口の中へたくさん餌を入れて来て、子供は親の口の中へくちばしを入れて餌をもらうのです。

ツルは育ちが早く、3ヶ月位で親と同じ位になります。空も飛べるようになりますが、からだの色は茶色がかつたきたい色をしているので、親か子供かすぐわかります。

日本には、北海道の釧路に200羽程います。子供が大きくなると人間と同じように2羽づつ仲よく独立して生活をするようになる。

あなた方のお父さん、お母さんはあなた方が早く立派な人になつて独立して生活が出来るように一生懸命育てて下さる。動物も同じです。子供が独立して生活が出来るようになるまで、ほんとうに一生懸命、命がけで子供を育てるのです。

自然保護と動物

動物の保護ということは外国でも日本でも相当盛んになつて来ている。人間が多くなるにつけてこうした事の大切な事が痛切に感じられる。国際的にも考えねばならぬ事で現在では3年に一度協議会を開いている。

地球上の事は一つのバランスの上に立つてゐる。人間の病気はからだのバランスがとれなくなつた時の現象である。

地球上のバランスが破れる、それが地球上にどう影響するかということは別にして、それが人間の生活に被害がなくても他の動物のためには住がおびやかされたり、食物がなくなつたりしてその生活がおびやかされ、結果的には動物が減つて行く。

存在の権利は人間だけのものではない。動物も植物も一様にこの権利を持つてゐる。

動植物には種属保存のために（最も基本的なことではあるが）これを保護しなければならぬ。保護しなければ滅亡してしまう。生物が地球上に適しない事になる時は亡びて行く、自分の種属を繁栄させて行くには他の者をおさえて、勝つて行かねばならぬ。そういう意味では戦争も起るのである。その結果として表面的には統一は出来るかも知れぬが根本的に統一することは絶対に

ない。

行きすぎという事であるが、昔しのは虫類を見ても判るように大きいものはよいであろうが、大きくすぎると早く死んで行く。物をくわえるのに牙が必要であるが、余り大きすぎたり長すぎたりすると用をなさなくなる。平行を保つた発達ということが望ましい。人間の数が余りに増えても他の動物が滅亡してしまつてもどうかと思う。

自然保護とはこうした所から出た事と思う。人間だけに存在の権利があるのではない。

動物を可愛がれというが、牛や馬を食つているではないか。それで可愛がるとどうしていえるか。根本的にいうならば食物が充分にあつて、動物を殺さなくてもよい時に始めて可愛がるという事が出来るのではないか。

生命の尊重ということより出発しなおさねばならぬ。アフリカなどで土人を治療してやると色々な動物を持つて来る。だが、その動物を殺すことは、殺す以上に利がなければならぬ。利がなかつたならば殺してはならぬ。

ペリカンを養うには魚を餌にやる、魚を殺すことによつてペリカンは育つて行く。

かように殺す以上に効果がなければならぬ。人間の生命を保存する為めには牛や馬を殺す。これは必要止むを得ぬことなのである。

人間が生存するためには他の動物を犠牲にする。慘酷な様だが仕方がない。

終戦後各地に暗屋がいた。道ではづれた事を平気でやる。他人は非常に迷惑をする。でも、それをやらねば自分がまる。自分の都合のよい事を考えると他人に迷惑をかけることになり不愉快な思いをさせることになる。いいかえると他人をいじめることになる。いじめるという事は、他を征服することの一つである。西洋の奴隸はよい例である。だが完全に征服という事が出来るだろうか。永い年月の間には必ず返逆されて来る。決して完全な征服は出来るものではない。いじめる事の反対が保護なのである。

現在日本で滅亡寸前の鳥、こうのとり、とき、たんちよう、あほおどりなどがある。こうした鳥を保護しようという事は当然のことである。

たんちようは北海道とシベリヤだけだと思われる。北海道のは大正九年判明して以来多大の保護をしている。

ツルは大別して、たんちよう系とかんむりつる系の2種になる。ツルは樹上には決して巣を作らない。毎年5月頃になると卵を産むが1ヶ産んで2日置いて、又1ヶ産む抱卵はおす、めす交代でやる。鳥類は姿がよく似たおすすめはツルのよう共同でやる。だが夜は大低めす昼はおすが抱卵する。そして32日で雛が出て来る。

めすが抱卵している間はおすは必ず巣の近くにいて警戒している。飼育の係もこの時は余程注

意しないとおすぐにかゝられる。くちばしでつゝかれたり羽でたたかれたりする。子供は茶色でピーヨピーヨと鳴く。ツル餌はどうしよう小魚、穀物などだがおすもめすも子供に餌をはこぶ。だが子供は子供の口先へもつて行つてやらねば食べない。地上に置いたのでは決して喰べない。

さぎ、ペリカンなどは親が一度呑み込んで、子供の前で口を大きくあけてやると子供は親の口の中へくちばしを入れて親の食道の中にある餌をとつて喰べる。

ツルは育ちが早く3ヶ月位で親と同じ位になる。そして親と同じ様に空が飛べるようになる。

ツルの親は2人で子供1人を連れて歩く、2ヶ月を産んだので2羽の子供がいるはづだが誰か調べても1羽しか連れていらない。2ヶ月の卵は同時に生れたのでなくて2日おいて生れているので後に生れた方がどうしても弱い。その弱い方を連れているのではなかろうかという。先に生れた方は達者なので、一人で自由勝手に行動しているらしい。親と一緒に空を飛べるようになつても子供はまだ茶色をしているので親か子供かすぐ見分けがつく。

釧路では、約200羽位のたんちようがいる。子供が大きくなると人間と同じように2羽づつ独立して生活するようになる。

しかし秋になるとおす同志猛烈な闘争をしてめすをうぱいあい、勝てば数頭のめすを連れて一群になつている。春になるとおすは角が落ちるし、めすは子供を産んで非常に強気になるので、おすは実にだらしなくなる。そこでめす同志子供を連れて一群になりゆうゆうと遊んでいるが、おすはおす同志で実にだらしなげなさみしげな生活をしている。

人間も一種の動物で只、言語があり文字があることなどが他の動物と違う所で生物学的法則による一種動物である。

人間は一夫一婦でよい結婚をして種属保存の為めに子供を育てゝゆく義務がある。

ツルでさえ自分の身を捨てても子供を守つてゐる。成長すれば独立して生活をするが、親孝行の出来るように教育をして行かねばならぬ。不孝な子供というが実は親が子供を教育しなかつた。出来なかつたのだ。どうしても孝行の出来る親孝行をする子供に育てねばならぬ。

東　　谷　　薰　　記